
好きなキャラクターを桜見市に配置してサバイバルゲームをやってみた

へラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きなキャラクターを桜見市に配置してサバイバルゲームをやってみた

【Nコード】

N7937X

【作者名】

ヘラ

【あらすじ】

桜見市……

そこは時空王「デウス・エクス・マキナ」の後継者を決めるため、今まさに、サバイバルゲームが行われようとしているところだった

……

12人の所有者たちによる、サバイバルゲームが今始まる！

それぞれの日記

登場キャラ

1st 天野 雪輝

2nd 我妻 由乃

3rd 上条 当麻

4th 五十嵐 丸太

5th 千池 清正

6th 鷹見 水名月

7th 吉井 明久

8th 坂本 雄二

9th 雨流 みねね

10th 御坂 美琴

11th ジョン・バックス

12th マリオ

それぞれの日記

1st 無差別日記

自分の周りのことが90日間先まで予知されている

2nd 雪輝日記

1stのことを10分おきに記録した日記

3rd 幻想日記

自分が壊していく幻想を記録していった日記

4th 罪の枝日記

自分が罪の枝を使うときの状況や対象などを記録した日記

5th ズッパシ日記

自分が「ズッパシ」と感じたことを記録した日記

6th 狂気日記

自分が狂ったことを記録する日記

7 t h バカ日記

8 t h 自分がしたバカなことを記録
神童日記

9 t h 周りのことや自分のことを客観的に記録した日記
逃亡日記

1 0 t h 自分の逃げ道などを記録した日記
乙女日記

1 1 t h 自分のことを乙女チックに書いた日記
t h e w a t c h e r

他人の日記を覗き見る日記
1 2 t h 国民日記

ダウンロードした国民の未来がわかる日記。ダウンロードした国民は自分のことが3日先まで分かる「プチ未来日記」の能力がもらえる。

それぞれの日記（後書き）

ちなみにルールは原作と同じです

あと、更新は不定期です

因果律大聖堂

〈因果律大聖堂〉

デウス「今日、君たちが集まってもらったのは他でもない。この桜見市で神の座をかけたサバイバルゲームをやってもらう」

1st「ルールは原作のときと変わらないの？」

デウス「おい1st、原作とかあまり口にするな。……まあルールは多少変わり、1st、2nd、9th、11thは原作のときとは何ら変わらないが、そのほかのものはサバイバルに慣れていないようだから、日記が壊れたり、殺されたりしても、存在が抹消されることはない」

9th「思いつきり原作って言うてるじゃねーか」

デウス「まあさっきあげた四人以外は気楽にゲームを楽しんでくれ」

7th「あー、ところで原作のルールって……」

デウス「それについては原作を読んでくれ。そうすれば分かるはずだ」

9th「おいちょっと待て、デウス」

デウス「なんだ？9th」

9th「原作読みましたら、あたしらの素性がばれるじゃねーか」

デウス「その通りだな。……では軽くルール説明をしよう。まず君たちに渡した『未来日記』、これが壊されるとゲーム終了だ。あと殺されてもゲーム終了だ。分かったな」

全員『適当！！！！！！！』

デウス「それでは、頑張ってくれ」

1st「それと、もうひとつ聞きたいことがあるんだけど……」

デウス「なんだ？雪輝」

1st「名前をばらされた！！」

2nd「私たちだけ、ルールが違うって不公平じゃない？」

デウス「それもそうだな。……では全員において、ゲームから失格した場合、ゲーム時の記憶を失ってもらう。それでいいか、2nd」

2nd「ええ」

デウス「それでは、解散」

こうして、12人の所有者たちのサバイバルゲームが始まった！

因果律大聖堂（後書き）

次回からは基本的には1st、4th、7thあたりを中心に書いていきたいと思います

情報

<1st side>

「ユツキー、早速、日記所有者を殺しに行きましょう」

放課後になると僕の彼女である我妻由乃が話しかけてきた。

「なんや、我妻。未来日記ゲームはもう終わったで」

由乃にそう言ったのは僕の隣の席に座る日野日向だ。

「私たちまたゲームに参加することになったの。ね、ユツキー」

「ね、って言われてもなあ……」

「なんや、またデウスが変なことでも考えとんのかいな」

「まあ、デウスは変人だからね」

「神だけどね」

はっはっは！と3人で笑いあう。うん、実に日常的な風景だ。ここで、僕たちが住んでいる桜見市について説明しよう。

桜見市は人口が……多くて、面積も……そこそこある。普通の土地だ。ちなみにこの市長が11thだったりする。あと中学校はもちろん、高校や大学、病院や観光用のタワー、果てには刑務所があったりする、なんとも不思議な町だ。

「そうだね……まあ、僕たちはとりあえず来須さんのところに行こう。なんとなくゲームっぽくしないとデウスに怒られそうだからね」

「じゃあ、がんばれや、天野」

「うん」

そうして日向は帰っていった。

「じゃあ行こう、ユッキー」

~~~~~  
~~~~~

「と、いうわけで。情報お願いします」

来須さんをお願いしてみた

「はあ……お前らものんきなもんだな……」

来須さんがため息をつく。よし！ここは一つ話題を変えて……

「あ！来須さん、自分が日記もらえなかったからって拗ねてるんじゃないですか」

「ギクッ！」

「ユッキー鋭い。私もそう思ってた」

「おい、お前ら！大人をからかうのもいい加減にしろ！」

あ、凶星

「というわけで情報ください」

「はあ…お前らものんきなもんだな……」

『やっぱり拗ねてる』

「だあーっ！分かったよ！お前らは俺の心をえぐって何が楽しいんだ！」

「いやいや、僕たちはただ単に情報がほしただけですよ」

「そうそう。別に来須の心をへし折ってやろうとか、原作でユツキ―を殺そうとしたから首でもちよん切ってやろうとか思ったりしてないから」

由乃がさらっと恐ろしいセリフを口にする。

「思ってたんじゃないかー！」

「大丈夫ですよ、来須さん。今回は死んだ人は全員デウスが元通りにしてくれますから、来須さんも安心して情報を渡して、首切られてくださいね」

満面の笑みで僕が告げると……

「どっちにしる死ぬんじゃないかー！」

来須さんは叫んだ。

「とにかく情報を渡せばいいんだな！」

「ええ、そうよ」

「聞き分けのいい人は好きです」

「だあーっ！じゃあ、やるよ！」

そう叫んで、来須さんは机の引き出しの中を探り始めた。何気にこの人、こういうことがあると踏んでいたのではないだろうか……

「ほら！」

そう言つて来須さんが僕たちに渡した資料には、とある一人の少女が映っていた。

「これは……？」

「ああ……名前は御坂美琴、お前らと同じ14歳で学校も同じ、ただ、こいつは電気系統のものを自由に動かせる能力があるらしくて、そこが厄介だ」

「なんでそんなに入念に調べてるんですか？」

最近はやりの『ストーカー』という奴だろうか……

「つい一週間前のことなんだがな、唐突に幻聴が聞こえてな『御坂

美琴という少女についての情報を集める』っていう内容だな。とりあえず『なんでだ』と聞き返したら、『神の命令だ』と言って、幻聴は聞こえなくなった。ま、とりあえず情報だけ集めといたってわけさ」

なるほど……

「幻聴が聞こえるってことは、来須さん、怪しい薬やってるんですか？」

「やってねえよ！」

「え！課長！警察のくせに薬やってたんですか！？」

「おいコラ！西島！そっだけ反応すんじゃないよ！」

「というわけで、怪しい薬をやってる警察官は西島さんに任せました！」

「ああ、分かった！……雪輝君、行っておいで！」

「ありがとうございます。……行こう、由乃！」

「うん！」

「おい！そんなシーンじゃないだろ！」

「さあ課長、洗いざらいはいてもらいますよ！」

「雪輝！我妻！待ってくれ！頼むから、おいていかないで！」

「それでは、来須さん！情報ありがとうございます」

そう告げて僕と由乃は警察署を後にした。……さあ、今から協力者を集めに行こう！

「まってくれえええええええええええ！！！」

……後ろから聞こえてきた声は無視することにしよう！

協力者

< 1 s t s i d e >

さてと… 来須さんから情報も貰ったし、あとは武器の調達か……

由乃と警察に行った次の日。休日だったので、僕と由乃はあるところを訪れていた……

「というわけで、武器をもらえそうらしいんだけど」

「何の脈絡もなくいきなり話すな。しかも元担任に対してそのしゃべり方はないだろ」

僕たちはもと通っていた学校で、僕たちの担任をしていた火山先生のもとを訪ねた。

「いいじゃないですか、ちゃんと返しますんで」

「いやいや、こっちは何一つ分からのだが……」

「とりあえず、またサバイバルゲームが始まったので武器をください」

「なに！？じゃあ俺の殺人日記も未来日記と化して……」

『ません』

僕と由乃の突っ込みが入った。

「ルールは前回のと変わらないのか？」

「先生、さすが元教師ですね」

「そんなことはどうでもいい。とりあえずルール説明をしろ」

とりあえず、大雑把にルールと敵の情報の説明をしたところ、先生は快く武器を貸してくれた。けっこう大型のコンバットナイフだ。

「とりあえず、それが俺が持つてる武器の中で一番便利なものだ。あと防護服も2着かそう。むこうが電気で来るなら電気を防げばいいだけだからな」

「さすが先生、話が分かる！」

「ああ、頑張れよ、天野、我妻」

「先生、ありがとうございます！」

なんで先生がそんなノリノリなのか分からないが、とりあえず武器も防護服も貰ったことだし、僕たちは先生の家を後にした……

~~~~~

しかし、このコンバットナイフだけでは心もとない。そう思った僕と由乃はもう一人の知り合いを訪ねた……

「催眠術の仕方を教えてください」

「エエト……ドウイウコトダ？」

「いいから早く教えなさいよ、それとも前みたいに首ちょんぱされたいの？」

「イヤ…催眠術ヲ教エルコトハイインダガ……」

「じゃあ早く教えてくださいよ」

「……分カツタ。ソレデハマズハ催眠術ノ基本カラ教エヨウ」

僕たちが訊ねたのは原作で椿さんを殺そうとして、由乃に殺された平坂さんだ。聞くところによると平坂さんは催眠術の天才らしい。ちなみに住所は「山小屋」

というわけで、僕たちは平坂さんから一時間半ほどたっぷりと丁寧にレクチャーを受けた。

さすが正義の味方、教えるのがうまい

「トコロデ、催眠術ナンカ誰ニ使ウンダ？」

……教えるべきか教えるべきでないか……

「大丈夫よ、御目方教みたいな悪い奴らを倒すだけだから」

今日初めて由乃がいて助かったと思った。僕だけだったら返答に窮しただろう。

「ソウカ……ダガ、クレグレモ無茶ダケハスルナヨ」

何ていい人なんだ……こうなったら平坂さんの期待に応えられるよう頑張ろう。

そう思いながら僕たちは「山小屋」を後にした。

~~~~~

「とりあえず、ほしいものは全部そろったね」

「それじゃあ早速殺しに行きましょう、ユッキー」

「あ、ちょっと待って。日記を見てからにしよう」

「うん分かった！『13:20 ユッキーが10thと戦っている。ユッキーカッコいい！私も頑張らなくちゃ』13:30ってことは今から一時間後ね……どうする？ユッキー」

「うーん……どうするって言われてもなあ……」

僕の日記にも由乃の日記と同じぐらいのことしか書いてない。

『P r r r r r r r r r』

「あれ？誰からだろうっ？」

ディスプレイを見ると、知らない電話番号からだった。

「はい、もしもし」

僕が電話に出ると、突然、由乃の日記からノイズ音が鳴りだした。

<1st side end>
<No side>

『もしもし』

『はじめまして、1st……いや、天野雪輝！』

『ええと……間違い電話ですか？』

『違うわよ！私は10thよ』

『どうしたんだ』

『私の日記によるとねえ、一時間後にあんたたちを倒す予定になつてるんだけど、その時間はちょっと都合が悪いから、三十分後にしてくれないかしら』

『え？それ、わざわざこのタイミングで電話してくることじゃないよね？』

『そう、それじゃあ三十分後に御目方教駐車場で』

『話聞いてない！』

『ブッッ、ピー、ピー、ピー』

<No side end>
<1st side>

「ユツキー、10thの言つこと聞くの？」

「んー、とりあえず聞いておいたほうがよさそうだね。女性は怒らせると手がつけられないからね」

由乃も然り。

「ということで、僕はあと一つ居るものがあるから、由乃は先に行つておいて」

「うん、分かった！」

交戦（前書き）

ち
よ
っ
と
グ
ロ
い
シ
ー
ン
が
あ
り
ま
す
が
気
に
な
さ
ら
ず
読
ん
で
下
さ
い
w
w

交戦

<1st side>

僕が駐車場について5分後、ようやく10thが現れた。

「随分と遅かったね」

「こつちもこつちでいろいろと理由があるのよ」

「ねえ、ユツキー早く始めましょう」

「記念すべきサバイバルゲームの初の脱落者は誰だろうね」

「それじゃあいくわよ!」

そついうと10thはいきなりコイントスをした。……はっはっは
!コイントスだけで僕たちに勝とうなど、おこがまし……

『ど!ごおおおん!』

……

「さあ、1st。かかってきなさい!この常盤台の超電磁砲^{レールガン}、御坂
美琴が相手よ!」

「あっはっは。残念だけど10th。そんなことしてる暇は僕たち
にはないんだ」

「そうね、ユッキー。早く殺っちゃいましょう」

「この私を倒す？……あっはっは、笑わせんじゃないわよ！」

完全に頭がアレなこのようだ。仕方ない……

「それじゃあ、こちら全力でいかせてもらっよう」

『パチンっ』

由乃が指を鳴らした直後、大勢の人たちが駐車場になだれ込んだ。き

「あ、あんたたち！　いったい何をしたっていうのよ！」

「簡単なことさ。催眠術だよ」

「催眠術！？」

「まあ、説明が面倒くさいから省略させてもらっけどね」

さすがの10thもこれには手が出ないだろう。人海戦術ってやつだ。ちなみにこの人たちは全員御目方教の信者の人たちだ。

「くっ」

「あっはっは、無様だね10th。さっきまでの威勢はどうしたんだい？」

「くっ。……1stおおおおお！！」

『どぉおおんー!』

「あつはつは、どこを狙ってるんだい10th。そんなことじゃ、僕たちを倒すどころか、汚れすら付けられないよ」

「そうよ、あきらめなさい10th」

なすすべもなく、信者に痛みつけられて、どんどん弱っていく10th。

このままでも、おとなしく日記を渡すだろうと思っていた。…しかし10thは決して僕たちに日記を渡そうとはしなかった。

「おとなしく日記を渡したらどうだい10th?」

「誰が…あんたたちなんか…渡すもんですか」

「これは忠告だよ。僕たちに日記を渡せば君は傷つかなくて済むんだよ」

「最終警告よ。私たちに日記を渡すか、渡さないか」

「渡すわけ…ないじゃない!」

本当に残念だ…

「それじゃあ、さよなら」

『パチンっ』

僕と由乃は同時に指を鳴らす。すると信者たちは駐車場から出て行き……

「どうだい10th。自分の体が言うことをきかないというのは初めてだろう?」

「な……にを……したの……よ……」

「最初に言っただろう。催眠術だよ。もつとも、僕のは『催眠』というよりは『操作』だけだね」

「それじゃあ、ユッキー」

そう言っただ僕は10thを操作して、マジックショーなどで見かける箱の中に10thを入れた。

「黒ひげ危機一髪っていうゲームを知ってるかい?僕はあのゲームが大好きでね、ダーツをやり始める前はよくあれで遊んでいたよ」

「あんたたち、いったい何をするつもりなの!!!!!!!!!!」

「簡単なことだよ。僕と由乃は火山先生からもらったコンバットナイフがある。そして10thは箱の中にいる。もう想像がつくだろう」

「そんなことして、ただで済むと思ってんの!!」

「だって、ゲームオーバーになったら、このサバイバルゲームの記憶は、デウスが完全に消し去ってくれるからね」

「それでも…」

「ああ、あと一つ言い忘れていたけど、このサバイバルゲーム、日記を壊されてゲームオーバーになったらにも後遺症が残らないけど、傷を負ってゲームオーバーになったら、体は元に戻るけど、たまに痛みだけがフラッシュバックすることがあるからね」

「ねえ、日記を渡すから！それだけはやめて！おねがい」

最後のほうの声は小さくてあまり聞き取れなかった。だが、日記を渡すなら、もらっておこう。

『パチンっ』

僕は再び、催眠術をかけた。箱の中は電気を通さないように加工されてある。だから、日記を受け取って、僕は10thを再び箱の中に戻した。

「ねえ、なんで箱の中に戻したの？」

「分からないかい10th。今からゲームをするからだよ」

「ルールは簡単。今から、ユッキーと私が交互にコンバットナイフを箱に刺していくから、先に10thに致命傷をおわしたほうが負け」

「ちょっと！待って！……」

「それじゃあ」

「あ、刺さった」

「ちょっと中を確認してみてもいいかな、ユッキー」

「とりあえず確認しよう」

僕たちは、箱の中から10tℎを出して、どこに刺さったのか確認してみた。

「なんだ、手が……」

しかも、見た感じ骨が一本も切断されてない。

「おねがい……だから……もうやめて……」

「どうする？ ユッキー」

「そうだね、今ので反抗する気はないって分かったし、手もしばらく包帯しとけば治るしね。それにこの日記、意外と使い物になるかもしれない。まああとは10tℎ次第だけだね」

「なんでも言うこと聞きますから……命だけは……」

「ということだ。じゃあ、僕はちよつと行くところがあるから、由乃、少しの間だけ10tℎのこと頼んだよ!」

そう言って僕はある場所を目指した

写真

<1st side>

「こんにちは」

「あら、雪輝君じゃない。どうしたの？」

「ちょっと一つ頼みがあるんだけどね」

僕は10thと戦った(?)後、御目方教の本堂にいる春日野椿さんを訪ねた。

「デウスの気まぐれで、またサバイバルゲームが始まったんだけど……」

「おかしいわね……私の千里眼日記は未来日記になってないわよ」

「なんかデウスが『原作以外の奴も登場させたほうがいいだろう』とか言っちゃって、町を改造してまで他のキャラも登場させたんだよ」

「確かにこの前まで刑務所とかなかったし……で、とりあえず要件を言いなさい」

「いや、別に大したことじゃないんだけどね、はいこれ」

と言って、僕は椿さんにあるものを渡した。

「何これ！駐車場がなんでボロボロになってるのー!!」

「いやあ、ちょっと10thが色々しかしてさ……」

とりあえずあとでばれると怖いので、駐車場の写真(さっき撮っておいた)を椿さんに渡した。

「はあ……もう直すのも面倒くさいし、いっそのままにしようかしら」

「うん、僕もそれがいいと思う」

「で？ほんとうの用事は？」

「そうそう、僕の日記に『9月22日 23:47 何者かが僕の家に侵入してくる 23:48 そいつは10thの手下で白井黒子と言らしい 23:50 僕は為すすべもなく殺される DEAD END』だって」

「で？私はどうすればいいのよ」

「いやあ、僕の家、いま母さんがいるから、騒がしくすると怒られちゃうんだよね。だから3日ぐらいここで匿ってよ」

「まあ、別に一人くらいいいけど……」

「いや、僕と由乃と10thの3人だよ」

「むりにきまつてるじゃ……」

「秋瀬君のプロマイド(非売品)あるよ」

「本当につー!!」

「非売品だよ。秋瀬君が好きならこれはのどから手が出るほどほしい一品だよ」

「分かったわ!愛!お鈴!布団3セット追加あ!!!」

「ストップストップ!いま何時だと思ってるの!?まだ寝ないよ!」

「それで、秋瀬君のプロマイドはいつ?」

「秋瀬君のこととなると話が早いよね」

「いいから早く言いなさい!」

「とりあえず、今から写真を撮りに行って、現像してだから、うまいければ三時間くらいかな」

「早くしなさいよ!」

「分かったから!落ち着いて落ち着いて」

この人、末期症状だ……

なにはともあれ、交渉成功。あとは、秋瀬君の写真を撮りに行って、学校から必要なものを持ち出して、また戻ってくるだけだ。

さてと、とりあえずいったん由乃のところへ戻ろう。

そう言つて僕は電話を切り、秋瀬君の家へ向かった。

~~~~~

「やあ、こんにちは、雪輝君」

「こんにちは、秋瀬君。早速だけどいいかな」

「ああ、僕は準備万端だよ」

とりあえず、秋瀬君の写真を30枚ほど撮つて、うまくできたやつだけ現像してもらおう。

~~~~~

「ありがとう、秋瀬君」

「どういたしまして」

「それじゃあ、またあさつて、学校で」

そう言つて、僕は秋瀬君の家を後にした。

~~~~~

「さてと、写真も現像したし、学校から必要なものも取つたし、もう大丈夫だよな」

独り言を言いつつ、御目方教に戻る。ちなみに母さんには友達のところ遊びに行くと言ってある。

「さてと、明日の夜の決戦に向けて、今日は早めに寝るとしよう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7937x/>

---

好きなキャラクターを桜見市に配置してサバイバルゲームをやってみた

2011年11月30日17時49分発行